

【四国新聞社賞】

認め合える未来

高松市立太田中学校 二年 湯原帆香

知らないこと。それは、時に相手を傷つける。

私の通っていたこども園には近くに障がい者支援施設があり、幼い頃から障がいのある方と交流する場面が多くあった。今年の六月中学生になってからは初めて、そこを訪れる機会を得ることができた。私が三年前に訪れたときよりも利用者が増えたそうので、施設は活気に満ちあふれていた。

私はそこで、施設の利用者である田中（仮名）さんと話をすることができた。田中さんは、ダウン症という障がいがあり、六年前からこの施設を利用している。手先が器用で、編み物がとても上手だ。そんな田中さんとの対話で、私はあることに気づかされる。会話も弾んできた頃、私は何気なく尋ねた。

「最近、悲しかったことはありませんか。」

田中さんは、そつと口を開いた。

「レストランに行ったとき、近くにいた子どもたちが明らかに自分を避けて、怖がっている表情だったことが悲しかったなあ。」

その言葉を聞いたとき、私は大きなショックを受けた。田中さんは続けて、

「一度だけじゃなくて、これまでも何度か似た経験をしたことがあるよ。」

私は、それから田中さんにいくつかの質問をした後、もう一度話を聞かせてもらえないかと尋ねた。田中さんは、嫌な顔一つせず、快諾してくれた。

施設からの帰り道、私はずっと考えていた。子どもたちはなぜ田中

さんを避け、怖がっていたのだろう、と。

ハッとした。彼らはダウン症のことを知らなかったのではないだろうか。初めて目にする、自分とは少し違う見た目をした田中さんのことを、理解できなかったのではないだろうか。

この予想が頭をよぎった二週間後の今年七月、私はもう一度田中さんと話をするために施設に向かった。私を見た田中さんは、この前と同じように優しく手を振ってくれた。

田中さんと軽いあいさつを交わすと、私は早速、この疑問を投げかけた。

「田中さん、この前の話なのですが、子どもたちが田中さんを避けたり、怖がったりしたのは、なぜだと思いますか。」

少し考えた後、田中さんはこう答えた。

「知らなかったんじゃないかなあ。私みたいな見た目の人もいるって。」

私の予想が確信に変わった瞬間だった。知らないこと。それは、時に相手を傷つける。そのとき、強くそう思った。それと同時に私の頭には、新たな疑問が浮かび、田中さんにまた尋ねた。

「互いのことを知って、認め合ったり、尊重し合ったりするために、私たちにはどんなことができるのでしょうか。」

二人で考えた。先に口を開いたのは、田中さんだった。

「色々な人に出会って、仲良くなることじゃないかな。」

「確かに、自分と違う人がいて当たり前だから、多様な個性を明るくとらえて、出会いを恐れないことが大切ですね。」

田中さんとの対話は一時間にも及んだ。田中さんは、私の疑問に真剣に向き合ってくれた。私は田中さんに感謝の気持ちを伝え、帰路についた。

私は、今回の対話を通して、分かったことが二つある。

一つ目は、自分の当たり前前は、誰かにとっては当たり前ではないこともあるということだ。正解を決めないことで多様な個性を認め合えると思った。

二つ目は、未来を変えるのは、私たちであるということだ。一人ひとりが互いを認め合い、そのルールを築いていくことが、差別のない明るい未来を切り拓くことにつながると思った。

この二点を踏まえて、私にできることは何だろうか。それは、多くの人と触れ合い、自分から知ろうとすることだと私は考える。

障がいのある方との交流会や、高齢者の方との交流会、地域の方々の交流会に積極的に参加し、互いの考えや思いを共有することで、自分とは異なる立場の人の思いを、より深く、心から理解し、認め合うことができると思う。人に関心を持ち、自ら知ろうと手をのばすところこそが、「未来」を創ることなのではないだろうか。

差別によって、人の心が深く傷つけられた過去を変えることはできない。しかし、未来は今から、いくらでも変えられる。見て見ぬふりをするのではなく、問題を解決するために、どんな困難にも仲間と共に、全力で立ち向かいたい。

自ら行動を起こしたその先に、差別のない未来があることを、信じて。

希望で満ちた世界を私たちが作ってゆく。まだ見ぬ未来と仲間のために。